

【教育ノート】

「養護入門」授業実践報告 (2)

—履修者の養護教諭に関する意識及び学習の経時的変化—

斉藤 ふくみ*, 野口 法子**, 山本 訓子***

"Introduction to Yogo": A Teaching Report (2)

—Changes in Students' Awareness and Learning about Yogo Teachers Over Time—

Fukumi Saito, Noriko Noguchi and Noriko Yamamoto

I はじめに

2020年度春学期開講の健康科学科1年次「養護入門」は、養護教諭一種免許状取得のための必修科目「養護概説」履修前の事前教育として新設された入門科目である。養護教諭養成教育において、「養護概説」に関する研究は数多くなされている^{1)~4)}中で、「養護概説」履修前の教育に関する研究は数少ない⁵⁾⁶⁾。はじめ、児童虐待、不登校、感染症など子どもを取り巻く健康課題が多様化・複雑化している中で、子どもの健康管理と健康教育に専門性を有し、関係者と連携・協働して課題解決へ支援するとともに、子どもが生涯にわたって健康に生活する力を持てるよう管理・指導する養護教諭は、教職員や学校関係職員をはじめ、保護者、社会から大きな信頼と期待が寄せられている。「養護入門」は、これらの資質能力を備えた養護教諭の育成を目指した専門的な学習にスムーズに入っていくよう、学校、教育、養護、子ども理解を内容とした導入科目である。「養護入門」の授業効果について検討すべく、初年度の授業実践報告を第1報⁷⁾としてまとめ、新型コロナウイルス感染症拡大の下、各授業担当者が工夫をこらして授業を行い、その結果、養護について学ぶレディネス形成と学習意欲向上に成果が認められた。

第1報の結果を受けて、第2報では、「養護入門」履修者の養護教諭に関する意識や学習がどのように変

化するのかに着目した。先行研究では、養護教諭特別科生の養護教諭に関する意識について一年間の経年変化を捉えた研究⁸⁾、教員養成教育における3年間の経年変化を捉えた研究⁹⁾がみられる。一方、授業科目の履修を通じた学生の変化に関する研究は、久保¹⁰⁾による「教育方法概論」講義前後の養護教諭の意識を比較した研究、永浜ら¹¹⁾による4年生対象の養護専門科目及び教職関連科目の受講による認識変化に関する研究があるが、「養護概説」関連の単一科目の履修については、小川ら¹²⁾が「養護概説」履修前・中・後を比較している研究があるものの対象は全国の養護教諭養成機関の学生であり異なる集団における一時点の比較である。このように、「養護概説」関連の単一科目の履修による同一集団の変化を捉えた研究は行われていない。

本授業の目的¹³⁾は、「養護教諭の専門的な学習に入る前の準備段階として、学校の理解、教育の理解、養護教諭の理解、子どもの理解を通して、養護教諭の職務に対する興味・関心を高め、学修意欲をみなぎらせる。」である。この目的がどのように達成されているのかを把握することは、授業担当者として当然の責務である。例えば、本科目の履修を通して、養護教諭の専門的学習に入る集団として、入門的知識を得ることで学生間の理解が取れんされていく過程を確認したい。また、全国的に先駆的に開始している養護の入門科目の学習効果を分析して発表することは、他の養護

受付日 2021.9.6 / 受理日 2021.11.17

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授/**関西福祉科学大学 健康福祉学部 准教授/**関西福祉科学大学 健康福祉学部 講師

教諭養成機関へ情報を提供する意義があると考え。

そこで、本研究では、開設2年目となる2021年度春学期に実施した「養護入門」受講により、養護教諭を目指す学生の意識や学習の成果の自己評価がどのように変化したのかを、初回（授業前）、中間、最終回（授業後）の3時点において、同一質問紙調査を実施することにより捉えられる経時的変化をもとにした授業評価をすることを目的とする。

II 方法

1 対象及び方法

対象は、2021年度1年次春学期科目「養護入門」履修者1年生78名である。有効回答者数（有効回答率）は、選択式質問項目では、初回・中間は78名（100.0%）、最終は75名（96.2%）、自由記述では、授業前・授業後の両方に記述があった者73名（93.6%）であった。

1) 選択式の質問項目の分析方法

方法は、質問紙調査を初回（第1回ガイダンス）、中間（第8回）、最終回（第15回）の3回、manaba（ASAHI ネット社の教育支援サービス）のアンケート機能を用いて実施した。質問項目は表1のとおりである。問1性別、問2志望については初回のみ、問3目

指す職業、問4志向、問5適性、問6意欲、問7「知識・理解」（4項目）、問8「思考力・判断力・表現力」（3項目）、問9「主体性・多様性・協働性」（2項目）については初回、中間、最終回に行った。問4～問6は養護教諭を目指す学生のみが回答した。問1～問3は単一選択式、問4～問9は、「非常にあてはまる」（5点）、「あてはまる」（4点）、「どちらともいえない」（3点）、「あてはまらない」（2点）、「まったくあてはまらない」（1点）の5件法であった。問7、問8、問9は、本授業の達成目標¹³⁾を用いた。

分析方法は、始めに各項目について平均値と標準偏差を算出した。次に初回、中間、最終の経時的変化を分散分析にて検討し、差が見られた場合には Bonferoni 法による多重比較を行った。なお有意水準を5%とした。解析ソフトは SPSS Ver. 27 を使用した。

2) 自由記述の分析方法

問10「どのような養護教諭になりたいか」は初回と最終回に行い、自由記述とした。自由記述については質的統合法¹⁴⁾を用いて分析した。はじめに自由記述データを、訴える内容が一つになるように素材を単位化してラベルを作成し、001～と順に数字をつけた。次いで、各ラベルを読み込んで方向性が似たラベル同士を集めて表札を作り、A 001～と順に割り振った。さらに表札の類似性を判断しグループ編成をし、B 001～と順に割り振った。表札の中で、グループ編成

表1 質問項目

実施日	初回（第1回）	中間（第8回）	最終回（第15回）
質問項目	問1 性別 問2 志望		
	問3 目指す職業 問4 志向 問5 適性 問6 意欲 問7「知識・理解」 1) 学校のシステム 2) 教育とは何か 3) 養護教諭の職とは何か 4) 子どもの発育発達段階 問8「思考力・判断力・表現力」 1) 子どもの立場から養護教諭の職を考える 2) 自ら養護教諭として働く意味を考える 3) 養護教諭の担う教育について考える 問9「主体性・多様性・協働性」 1) 養護教諭と子どもの関わりについて、他者と意見交換をすることができる 2) 学校の組織の一員としての養護教諭の役割について考えを深め、専門的学習に取り組む意欲を持つことができる		
	問10 どのような養護教諭になりたいか		問10 どのような養護教諭になりたいか

ができないと判断された表札は A ○○○として残した。なお、1匹狼のラベルは () をして記した。

Ⅲ 結果

1 授業形態・内容・課題

「養護入門」の授業形態、授業内容、各回の課題は表2のとおりであった。本年度も新型コロナウイルス感染症は拡大の一途をたどり、第1回～第12回は遠隔授業と manaba による課題研究を併せて1コマの授業形態で実施した。第13回～第15回の3回は、短縮対面授業と manaba による課題研究の授業形態であった。

2 倫理的配慮

履修生に対して、授業終了後 manaba 「養護入門」の科目ニュースにて、研究目的を説明するとともに、①履修者を1つの集団として扱い、個人が特定されないようにすること②プライバシーの保護を順守すること③協力に不承諾であっても、成績には一切影響しないことの3点を約束することを明示したうえで研究協力を求めた。なお、質問紙は意識を問うものであることから、回答に影響が出ないように、授業終了後に研究協力を求め、履修者78名の同意を得た。

2 対象者の特性

履修者78名中、性別は、女子76名、男子2名であった。本大学が第一志望の大学であった学生は64名、第2志望が8名、第3志望が5名、第4志望が1名であった。目指す職業は初回では、養護教諭が77名(98.7%)、一般企業が1名(1.3%)であった。途中で

表2 「養護入門」の授業形態・内容・課題

回	月日	授業形態	担当	授業内容	課題
1	4/8	遠隔授業・manabaによる課題	斉藤	ガイダンス、授業の進め方	養護教諭と子どもの図からどのような状況か物語の作成を指示
2	4/15	遠隔授業・manabaによる課題	山本	養護教諭の職務の特質を解説	子どものSOSのサインにはどのようなものがあるか指示
3	4/22	遠隔授業・manabaによる課題	野口	事例を通して、養護教諭にとって「教育とは何か」を考える①	事例から考えたことを記述
4	4/29	遠隔授業・manabaによる課題	斉藤	養護の機能と基本原理、前回の課題から養護の働きを解説	話しやすい養護教諭像の作画を指示
5	5/6	遠隔授業・manabaによる課題	斉藤	養護教諭の仕事、養護教諭の一日の例示から職務内容を解説	「保健室の良い(あるいは悪い)思い出」のエピソード記述を指示
6	5/13	遠隔授業・manabaによる課題	山本	健康観察について解説	子どものSOSのサインを分類するよう指示、特徴を考える
7	5/20	遠隔授業・manabaによる課題	野口	事例を通して、養護教諭にとって「教育とは何か」を考える②	事例から考えたことを記述
8	5/27	遠隔授業・manabaによる課題	山本	心の健康問題の特徴を解説	SOSのサインの対応策を考えるよう指示
9	6/3	遠隔授業・manabaによる課題	斉藤	養護の解釈、養護教諭の専門的機能、法的規定の解説	エピソード記述の1例から養護の概念の生成を指示
10	6/10	遠隔授業・manabaによる課題	野口	事例を通して、養護教諭にとって「教育とは何か」を考える③	事例から考えたことを記述 事例①②との比較を記述
11	6/17	遠隔授業・manabaによる課題	野口	事例を通して、養護教諭にとって「教育とは何か」を考える④	事例から考えたことを記述 事例①②との比較を記述
12	6/24	遠隔授業・manabaによる課題	斉藤	ケースメソッド	個人学習後、提出課題を相互閲覧にし、感想の記述を指示
13	7/1	短縮対面授業・manabaによる課題	山本	SOSのサインの対応策の解説、養護教諭の仕事の魅力を伝えあう	授業を振り返って養護教諭の仕事の魅力を考える
14	7/8	短縮対面授業・manabaによる課題	野口	山田洋次監督「学校」DVD視聴①	DVDを視聴して、あなたが考える「教育とは何か」を記述
15	7/15	短縮対面授業・manabaによる課題	野口	山田洋次監督「学校」DVD視聴②	DVDを視聴して、あなたが考える「教育とは何か」を記述

※短縮対面授業：60分間の対面授業+manabaによる課題

表3 目指す職業の経時的変化 (人)

	n	養護教諭	公務員	一般企業	その他
初回	78	77	0	1	0
中間	78	75	0	1	2
最終	75	71	1	1	2

は、養護教諭が75名(94.9%)、一般企業が1名(1.3%)、その他が2名(2.7%)であった。最終では、養護教諭が71名(89.9%)、公務員1名(1.3%)、一般企業1名(1.3%)、その他2名(2.7%)であった(表3)。

3 意識の経時的変化

1) 志向、適性、意欲の経時的変化

「現時点でどの程度養護教諭になりたいと思いますか(志向)」「現時点でどの程度養護教諭に適していると思いますか(適性)」「養護教諭の勉強に対してどの程度意欲がありますか(意欲)」の各項目の平均値及

び標準偏差と分散分析の結果を表4に示した。

「志向」は時期によるアンケート得点に有意な主効果はなかった($F(2, 138) = 1.78, p = .172$)。「適性」も時期によるアンケート得点の有意な主効果はなかった($F(2, 136) = 1.29, p = .278$)。「意欲」は時期によるアンケート得点の有意な主効果が見られた($F(2, 136) = 6.87, p = .004$)。Bonferroni法による多重比較の結果、初回と最終の得点に有意差が見られ、最終は初回に比べて意欲が低くなった。

2) 「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」の経時的変化

「知識・技能」について4つの質問項目、「思考力・判断力・表現力」について3つの質問項目、「主体性・多様性・協働性」について2つの質問項目の平均値と標準偏差、分散分析の結果を表5に示した。

表4 養護教諭を志望する学生の志向、適性、意欲の記述統計と分散分析の結果

	n	初回		中間		最終		ANOVA		
		M	SD	M	SD	M	SD	F 値	p 値	多重比較
現時点でどの程度養護教諭になりたいか(志向)	70	4.74	0.47	4.70	0.55	4.64	0.51	1.78	.172	
現時点でどの程度養護教諭に適していると思うか(適性)	69	3.59	0.71	3.46	0.74	3.51	0.68	1.29	.278	
養護教諭についての勉強に対してどの程度意欲があるか(意欲)	69	4.94	0.29	4.88	0.37	4.75	0.50	6.87	.004	初回>最終

表5 知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性の経時的変化

授業目標	n	初回		中間		最終		ANOVA			
		M	SD	M	SD	M	SD	F 値	p 値	多重比較	
知識技能	1) 学校のシステムとは何かを考え、自分なりに表現できるか	75	3.27	0.92	3.57	0.72	3.72	0.58	11.89	<.001	中間, 最終>初回
	2) 教育とは何かを考え、自分なりに表現できるか	75	3.52	0.81	3.84	0.62	3.85	0.63	10.05	<.001	中間, 最終>初回
	3) 養護教諭の職とは何かを考え、自分なりに表現できるか	75	4.07	0.72	4.23	0.56	4.17	0.64	2.23	.111	
	4) 子どもに関して考え、自分なりに知ることができるか	74	4.12	0.76	4.26	0.74	4.24	0.74	1.41	.248	
思考力判断力表現力	1) 子どもの立場から養護教諭の職を考え、自分なりに発表することができるか	75	3.85	0.75	3.96	0.65	3.96	0.78	0.94	.393	
	2) 自ら養護教諭として働く意味を考え、自分なりに発表することができるか	74	3.92	0.79	4.12	0.66	3.93	0.71	3.71	.027	中間>初回, 最終
	3) 養護教諭の担う教育について考え、自分なりに表現できるか	75	3.72	0.78	3.80	0.70	3.88	0.70	1.43	.243	
主体性多様性協働性	1) 養護教諭と子どもの関わりについて、他者と意見交換して互いに深め合うことができるか	75	4.29	0.78	4.27	0.68	4.23	0.67	0.29	.752	
	2) 学校の組織の一員としての養護教諭の役割について考えを深め、専門的学習に取り組む意欲を持つことができるか	74	4.76	0.46	4.57	0.58	4.41	0.55	12.49	<.001	初回>中間>最終

(1) 「知識・技能」

「学校のシステムとは何かを考え、自分なりに表現できるか」は時期によるアンケート得点の有意な主効果が見られた ($F(2, 148) = 11.89, p < .001$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、中間と最終は初回に比べて得点が高くなった。「教育とは何かを考え、自分なりに表現できるか」も時期によるアンケート得点の有意な主効果が見られた ($F(2, 148) = 10.05, p < .001$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、中間と最終は初回に比べて得点が高くなった。「養護教諭の職とは何かを考え、自分なりに表現できるか」 ($F(2, 148) = 2.23, p = .111$)、「子どもに関して考え、自分なりに知ることができるか」 ($F(2, 146) = 1.41, p = .248$) は時期によるアンケート得点の有意な主効果はなかった。

(2) 「思考力・判断力・表現力」

「子どもの立場から養護教諭の職を考え、自分なりに発表することができるか」は時期によるアンケート得点の有意な主効果はなかった ($F(2, 148) = .94, p = .393$)。「自ら養護教諭として働く意味を考え、自分なりに発表することができるか」は時期によるアンケート得点の有意な主効果が見られた ($F(2, 146) = 3.71, p = .027$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、中間は初回と最終に比べて得点が高くなった。「養護教諭の担う教育について考え、自分なりに表現できるか」は時期によるアンケート得点の有意な主効果はなかった ($F(2, 148) = 1.43, p = .243$)。

(3) 「主体性・多様性・協働性」

「養護教諭と子どもの関りについて、他者と意見交換して互いに深め合うことができるか」は時期による

アンケート得点の有意な主効果はなかった ($F(2, 148) = .29, p = .752$)。一方「学校の組織の一員としての養護教諭の役割について考えを深め、専門的学習に取り組む意欲をもつことができるか」は時期によるアンケート得点の有意な主効果が見られた ($F(2, 146) = 12.49, p < .001$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、初回、中間、最終と順に得点が低くなった。

4 「どのような養護教諭になりたいか」の授業前(初回)・授業後(最終回)の経時的変化

1) データの分析過程

履修者が自由記述したデータの分析過程を表6に示した。自由記述データを、訴える内容が一つになるように素材を単位化してラベルを作成した結果、授業前のラベル数は167個、授業後のラベル数は156個であった。次いで、各ラベルを読み込んで方向性が似たラベル同士を集めて表札を作った結果、授業前の表札数はA001～A027の27個と一匹狼のラベル1個の計28個であった。授業後の表札数はA001～A009の9個と一匹狼のラベル1個の計10個であった。さらに表札の類似性を判断しグループ編成をしたところ、得られたグループ数は、授業前はB001～B007の計7個であり、授業後はA001、A003、A005、A008、B001～B003の計7個であった。各グループにシンボルマークをつけ、以下【】で示す。

授業前は【小中高の時に世話になった養護教諭の存在】【専門職の知識・技術を身につける大学での学び】【子どもの観察】【入りやすい保健室づくり】【子ども・教員・保護者からの信頼】【子どもが成長できるような支援】【冷静な判断力】である。授業後は

表6 質的統合法の分析データ (どのような養護教諭になりたいか)

	データ	ラベル	表札及びラベル (根拠となるラベル数)			グループ編成 (根拠となる表札及びラベル)
授業前	73	001～ 167	A 001 (3) A 002 (5) A 003 (11) A 004 (2) A 005 (3) A 006 (4) A 007 (3) A 008 (3) A 009 (3) A 010 (6)	A 011 (5) A 012 (3) A 013 (5) A 014 (4) A 015 (5) A 016 (6) A 017 (4) A 018 (7) A 019 (3)	A 020 (4) A 021 (6) A 022 (2) A 023 (7) A 024 (14) A 025 (22) A 026 (12) A 027 (14) 039	B 001 (A 001) (A 002) (A 003) B 002 (A 009) (A 010) (017) B 003 (A 008) (A 012) (A 027) (039) B 004 (A 004) (A 014) (A 022) (A 024) B 005 (A 005) (A 007) (A 011) (A 015) B 006 (A 016) (A 018) (A 019) B 007 (A 006) (A 013) (A 020) (A 021) (A 023) (A 025) (A 026)
授業後	73	001～ 156	A 001 (10) A 002 (15) A 003 (11) A 004 (9)	A 005 (15) A 006 (14) A 007 (7) A 008 (28)	A 009 (22) 148	A 001 B 001 (A 002) (A 007) A 003 B 002 (A 006) (148) A 005 B 003 (A 004) (A 009) A 008

【「養護入門」の学習】【子ども・教員・保護者からの信頼】【居心地の良い保健室】【教職員・保護者・関係機関との連携】【子どもが成長し、自信に繋がられる関わり】【学校になくてもならない存在】【これからの

大学生活での学び】である。

2) 見取図

グループ編成で得られた授業前、授業後の各7個の

どのような養護教諭になりたいか？（授業前）

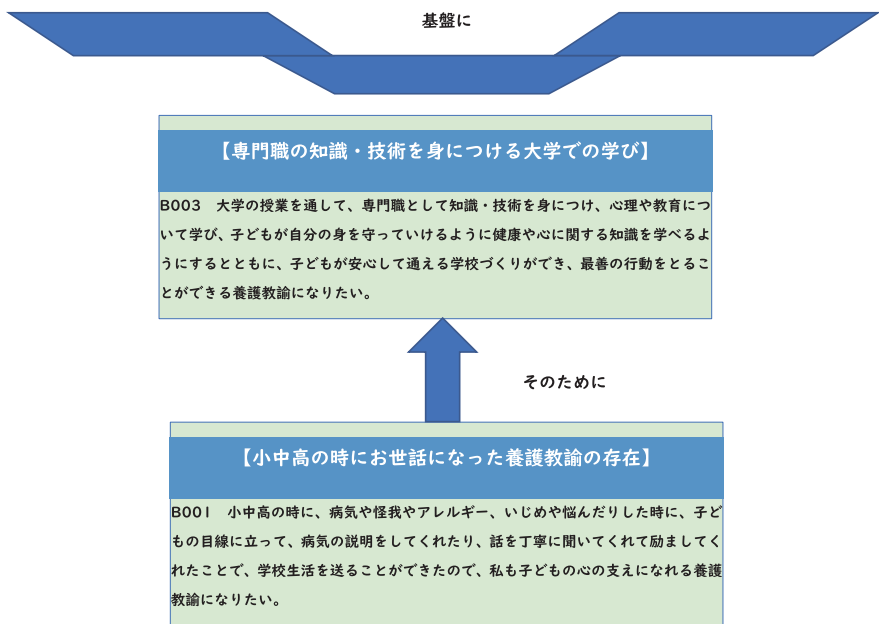
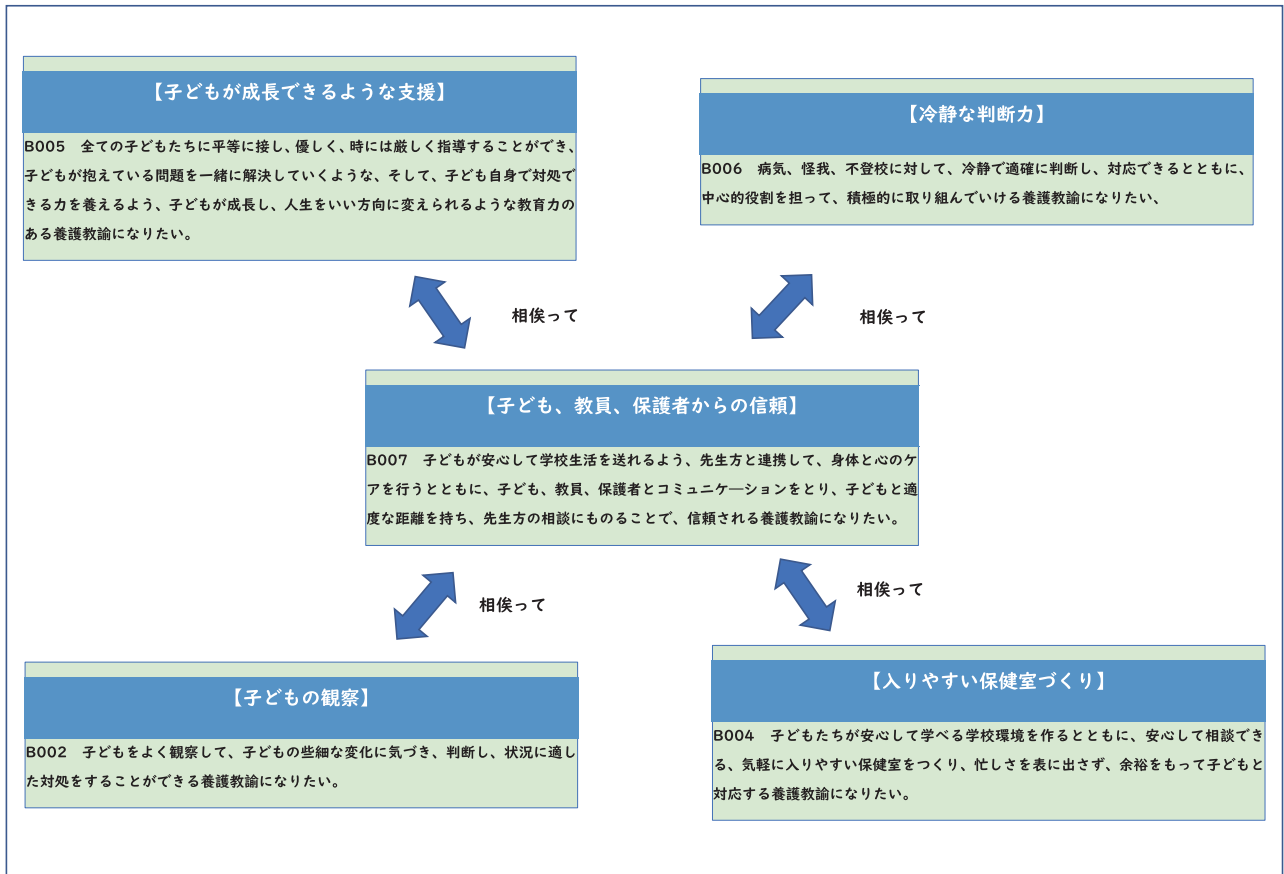


図1 「養護入門」履修者の授業前の記述（見取図）

シンボルマークについて、それぞれグループの関係を構造化して空間配置し、図解を作成した。授業前の見取図を図1に、授業後の見取図を図2に示した。

(1) 授業前の見取図の結論文

授業前において、学生は「どのような養護教諭になりたいか」の質問に対して、「話を聞いて励ましてく

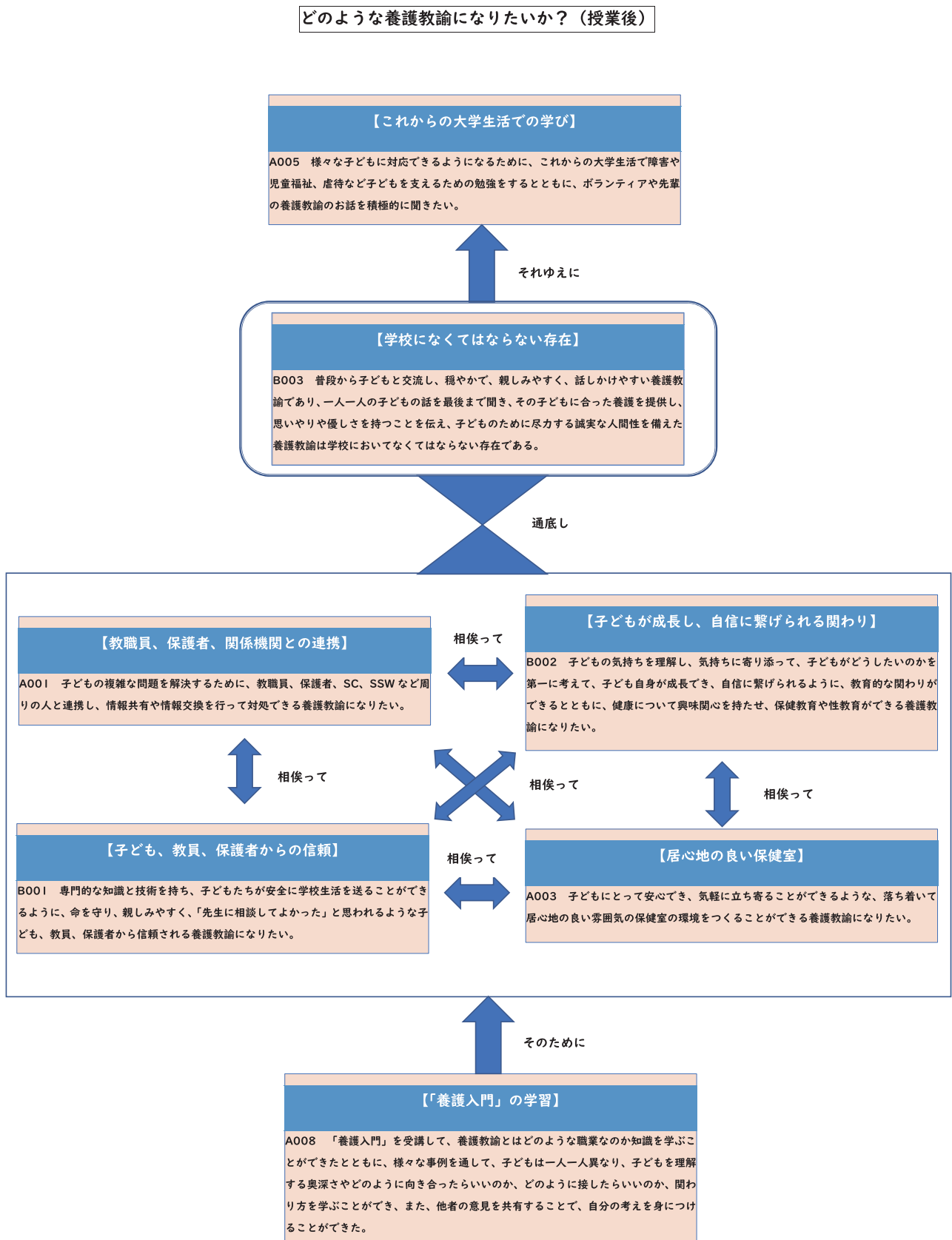


図2 「養護入門」履修者の授業後の記述（見取図）

れた心の支えとなる対応」をしてくれた【小中高の時にお世話になった養護教諭の存在】を挙げていた。そのために、大学での【専門職の知識・技術を身につける学び】を通して「子どもが自分の身を守っていけるように健康や心に関する知識を学べるようにし、安心できる学校をつくる養護教諭になりたい」と記述した。大学での学びを基盤として、【子どもの観察】をして「変化に気づき、判断して、対処できる養護教諭」、【入りやすい保健室づくり】をして「余裕をもって子どもと対応する養護教諭になりたい」と記述した。また、【冷静な判断力】を持ち、「病気・怪我・不登校に対して、中心的役割を担う養護教諭」、【子どもが成長できるような支援】により「子ども自身で対処できる力を養える教育力のある養護教諭になりたい」と記述した。これらの「子どもの観察」「入りやすい保健室」「冷静な判断」「子どもが成長できる支援」の4点はそれぞれ相俟って、「子ども、教員、保護者とコミュニケーションをとり、先生方と連携して子どもの身体と心のケアをすることで【子ども、教員、保護者に信頼される】養護教諭になりたい」と記述し、学生の「信頼される養護教諭」になりたいという思いを捉えることができた。

(2) 授業後の見取図の結論文

履修生は「養護入門」の15回の授業を終えた後に、「どのような養護教諭になりたいか」の質問に対して、【「養護入門」の学習】では、「養護教諭の仕事を知り、様々な事例を通して、子ども理解の奥深さや関わり方を学んだ」と記述した。そのために、「専門的な知識と技術を持ち、子どもの命を守り、安全な学校をつくることで【子ども、教員、保護者から信頼】される養護教諭」、「子どもが気軽に立ち寄れる、落ち着いた【居心地の良い保健室】をつくる養護教諭」、「【子どもが成長し、自信に繋げられる教育的な関わり】ができ、保健教育や性教育ができる養護教諭」、「子どもの複雑な問題解決のために、【教職員・保護者・関係機関と連携】して対処できる養護教諭になりたい」と記述した。これらの4点は互いに相俟ってなりたい養護教諭像を重層化している。さらにこれら4点に通底して、これらの能力・実践力を備えた養護教諭は、「穏やかで親しみやすく、子どものために尽力する誠実な人間性を備えた【学校になくてもならない存在】である」と記述した。そのような養護教諭になるために

【これからの大学生活】では、「様々な子どもに対応できるようにするための勉強やボランティアの経験をしたい」と意欲をみなぎらせていることが捉えられた。

IV 考察

1 「養護入門」履修による養護教諭志向・適性・意欲の授業前、中間、授業後の3時点の経時的変化

養護教諭志向と適性は、初回・中間・最終の3時点において変化は認められなかった。養護教諭志向は、入学直後に高いものの在学中に揺れ動き、低下の傾向をみることが指摘されている¹⁵⁾。同様に適性感についても揺らぎが生じると報告されている¹⁶⁾。これらは、主に3年次もしくは4年次の養護実習の経験や、専門科目において養護教諭の職の奥深さを知り、自分自身と向き合うことによる葛藤が起こるためと推察される¹⁶⁾。それに対して「養護入門」は、専門学習にいきなう入門的内容を主とするため、学生に揺らぎを起こさせるまでには至っていないためと考えられる。一方、意欲は初回と最終回間で有意差が認められた。初回の平均値が4.94と高く、低下したものの、最終回の平均値も4.75と高かった。本授業では、物語を作成したり(第1回)、担当者により事例¹⁷⁾を提示したり(第3、7、10、11、12回)、養護教諭の仕事の魅力を伝え合う(第13回)など工夫をこらした授業づくりを行った。これらの授業が最終回の平均値の高さにつながっていったと考えられる。本授業の目的である「養護教諭の職務に対する興味・関心を高め、学修意欲をみなぎらせる」は概ね達成できたといえる。

2 「養護入門」履修による学習の経時的変化

1) 「知識・技能」

「学校のシステムとは何かを考え、自分なりに表現できるか」「教育とは何かを考え、自分なりに表現できるか」はともに中間・最終は初回より得点が上昇し有意差が認められた。履修者の学校・教育への関心は高まっていったと考えられた。しかし、他の質問項目に比べて平均値は低かった。「学校のシステムとは何か」については、第5、9回の授業において、学校教育における学校保健や保健室の位置づけ、養護教諭の

一日、学級担任等との連携・協働などを取り上げ、例示して考えさせたものの「学校のシステム」に関するまとまった知識を扱うには至らなかったことが要因と考えられる。

「教育とは何か」については、教育というものを何も学んでいない段階の初回では、学生は、「教育とは、何かを教えるものである」というように一面的にのみ捉え、例えば、養護教諭の行う教育には健康に関する保健指導などをイメージしていると考えられる。そして、児童生徒の相談や話を聴く中には教育は含まれていないと捉えていると推測される。しかし、担当者から提示される事例に触れることから、教育とは単純なものではなく、児童生徒の相談に乗ることの中にこそ教育の本質があることに気づき、「どのように生きるのか」「どのような考え方をするのか」「どのように問題を乗り越えるのか」などを児童生徒自らが築き上げていくことに着目することによって、学生自身の中で教育に対する概念ができつつあると考えられた。この養護入門の授業は、教育とは深みがあることを知れば知るほど、そう簡単には一言で言い表せないことを実感し、そのうえで今後の4年間を通して「教育とは何か」を自ら構築していく作業を行うための第一歩となっている。

一方、「養護教諭の職とは何かを考え、自分なりに表現できるか」「子どもに関して考え、自分なりに知ることができるか」は、ともに平均値は比較的高かった。養護教諭の職と子どもについては、各回の授業で様々な角度から扱い、学生の思考を刺激できていたと考えられる。

2) 「思考力・判断力・表現力」

「自ら養護教諭として働く意味を考え、自分なりに発表することができるか」において、初回から中間にかけて上昇し、最終で下降した。初回は養護教諭として働くことの意味を考えるというより、漠然と描ける段階であったのではないかと推測される。「自ら養護教諭として働く意味」と直接的に関連する具体的な事例が授業で多く取り上げられたことにより学習がさらに深まり、初回から中間にかけて得点が上昇したが、その後、授業が進むにつれて、揺らぎや葛藤、養護教諭を自分の職として考え責任の重さを実感し始めたことにより低下の変化を呈したことが推測される。「子

どもの立場から養護教諭の職を考え、自分なりに発表できるか」「養護教諭の担う教育について考え、自分なりに表現できるか」はともに有意差は認められなかった。感染症の観点から、少人数での話し合い活動や考えを発表する機会が少なかったことが要因であると考えられる。来年度以降、対面授業で話し合いや発表の機会を設けることにより、変化するか検討していく。

3) 「主体性・多様性・協働性」

「学校の組織の一員としての養護教諭の役割について考えを深め、専門的学習に取り組む意欲を持つことができるか」において、初回、中間、最終と下降し有意差が認められた。しかし、先の意欲と同様に、他の項目と比べて平均値は高く、本授業の目的は概ね達成されたと捉えることができる。「養護教諭と子どもの関わりについて、他者と意見交換して互いに深め合うことができるか」は有意差は認められなかった。こちらも対面授業が少なかったことが影響している。なお、第12回の授業では遠隔授業で紙上ケースメソッドの形をとり、他者と意見の共有を行った。また、第13回の授業では短縮対面授業において、養護教諭の仕事の魅力を発表し合う機会を設けた。このように学生が発表して他者と意見交流する機会を今後さらに確保することが重要である。

3 「どのような養護教諭になりたいか」 の授業前後の比較

授業前の記述は、入学前の背景が異なる集団であり、個々の記述はバラエティーに富み、表札数は計28個となった。小中高の養護教諭との出会いをあげた学生は19名(26.0%)であった。大谷ら¹⁸⁾は、養護教諭は「何でも話を聞いてくれる」存在として印象づけられた者は、養護教諭志向が高くなっていると報告しており、養護教諭志向の重要な要素となっているといえる。図1にみるように、小中高で出会った養護教諭のようになるためには、大学での専門的な学習が必要であり、その学習が基盤となって、子どもを観察して変化に気づき、そのために入りやすい保健室を作り、子どもが成長できるように、優しく、時には厳しく指導することができ、冷静な判断力を持ち、子ども、教員、保護者から信頼される養護教諭像を記述し

た。しかし、いずれも自らの小中高での経験や見聞から導き出された像であり、表面的な記述にとどまっていることはいなめない。

授業後の記述は、表札数は10個と授業前の約3分の一となり、15回の授業履修を通して一定の知識理解に到達した結果と捉えられる。講義は、大学設置基準第25条¹⁹⁾に定められた講義、演習、実験、実習若しくは実技の4つの教育方法の一つである。今年度は、遠隔授業が主となったものの、音声付きパワーポイントなど視聴覚教材を使用し、事前資料提示や個別指導による双方向の指導を取り入れた。15回の授業により、履修生が一定の知識を獲得したことにより、まとまりのある記述データが得られたと考えられる。図2にみるように、履修生は「養護入門」の学習により、養護教諭とはどのような職業なのか知識を学ぶことができ、様々な事例を通して、子ども理解の奥深さや、関わり方を学ぶことができ、他者の意見を共有することで、自分の考えを身につけることができた。そのために、なりたい養護教諭像も子ども、教員、保護者からの信頼を得て、居心地の良い保健室環境をつくることができ、子どもが成長し、自信に繋がれる関わりをすることを通して教育できること、教職員、保護者、SC、SSWなどの関係者と連携をとり、情報共有や情報交換を行って対処できる養護教諭になりたいと記述し、養護教諭の理解の深まりや、SC、SSW、保健教育、性教育など専門に関わる語彙が増えた。これらの具体的な養護教諭像と通底し、普段から子どもと交流し、穏やかで、親しみやすく、話しかけやすい養護教諭であり、一人一人の子どもの話を最後まで聞き、その子どもに合った養護を提供し、思いやりや優しさを持つことを伝え、子どものために尽力する誠実な人間性を備えた養護教諭は【学校になくてはならない存在】であると記述した。

人間性については、小川ら²⁰⁾や川上²¹⁾の報告においても、なりたい養護教諭や養護教諭に必要な資質・特性の上位に挙げられている。さらに後藤ら²²⁾は、「受容」「相談」「母」「優しい」「聴く」などの語は、養護教諭を目指すにあたっての根幹のイメージであると述べている。本研究で導き出した【学校になくてはならない存在】は、養護教諭が担う養護の本質の理解に基づいた思考結果であり、本授業において3名の担当者が教育した成果であるといえる。

V まとめ

科目「養護入門」2年目の授業実践について、履修者の志向、適性、意欲の養護教諭に関する意識と学習の経時的変化を質問紙調査により明らかにすることを目的として分析した結果、以下の3点を得た。

- 1 養護教諭への意欲は、初回より最終は低下したが、平均値は高いことから、本授業は履修生の意欲に有益に作用した。
- 2 「知識・技能」では、「学校システムとは何か」「教育とは何か」において初回が最も低く、中間・最終と上昇し有意差が認められたのは、授業で事例を多く取り上げたことによると捉えられた。「思考力・判断力・表現力」では、「自ら養護教諭として働く意味を考える」は、中間で上昇し最終で下降したのは、授業で知識を得ることで自己との葛藤が表出した結果と捉えられた。「主体性・多様性・協働性」では、「学校の組織の一員としての養護教諭の役割について考えを深め、専門的学習に取り組む意欲を持つ」が初回、中間、最終と下降し有意差が認められた。しかし、平均値が高いことから、本授業の達成目標は概ね達成されたと捉えられた。
- 3 「どのような養護教諭になりたいか」の授業前後の比較では、授業前は小中高の養護教諭の存在が志望動機となって養護教諭像が作られていることが捉えられた。授業後は「養護入門」の履修により、目指す養護教諭像が明確化、具体化された。さらに養護教諭は【学校になくてはならない存在】という記述に到達し、今後の大学での専門的学習の意欲に繋がった。

以上の結果から、本年度「養護入門」の授業目的と達成目標はほぼ達成できたと結論づけることができた。

今後の課題として、遠隔授業の質的向上とオムニバス授業の配列など授業構成の検討が必要である。さらに、対面授業になった際は、教員と学生間、学生と学生間の対話やディスカッション、発表の機会を多くすることで、「養護入門」履修者の養護教諭に関する意識や学習がさらに向上することが期待される。

謝辞

本論文作成にあたり、研究にご協力くださった

2021年度1年次春学期「養護入門」受講生の皆様に感謝いたします。

【引用文献】

- 1) 三森寧子・竹鼻ゆかり・矢野潔子・西岡かおり・朝倉隆司・池添志乃他「養護教諭養成大学における『養護概説』開講の現状」『学校保健研究』59(1)、2017年、40-47頁
- 2) 天野敬子・小川文子「『養護概説』についての研究 第1報 シラバスの検討および担当教員への調査から」『愛知教育大学養護教育講座研究紀要』、7(1)、2006年、25-29頁
- 3) 今野洋子「『養護概説』における『保健室経営』の検討：養護実践力の育成を目指す養護教諭養成カリキュラムの視点から」『人間福祉研究』18、2015年、61-65頁
- 4) 斉藤ふくみ・鈴木薫・山崎隆恵「『養護概説』と『健康相談活動の理論及び方法』のシラバス調査」『茨城大学教育実践研究』36、2017年、247-254頁
- 5) 玉田明子・原祥子・吉田由美「授業『養護概説』の事前学習における学生の学び－保健室見学と養護教諭へのインタビューを導入して－」『島根大学医学部紀要』30、2007年、43-50頁
- 6) 堀内久美子・下村淳子「養護教諭養成課程1年生の授業に保健室見学をとり入れる試み」『日本養護教諭教育学会誌』5(1)、2002年、69-75頁
- 7) 斉藤ふくみ・野口法子・山本訓子「『養護入門』授業実践報告(1)－新型コロナウイルス感染症感染拡大下における工夫と成果－」『総合福祉科学研究』12、2021年、11-25頁
- 8) 斉藤ふくみ・宮越由紀子・津島ひろ江・藤井宝恵「養護教諭特別科生の在学中における養護教諭に関する意識の変化」『日本養護教諭教育学会誌』10(1)、2007年、61-75頁
- 9) 高旗浩志・岩田耕司「教員養成教育の成果とその検証－在学中の教職志向の経年変化と卒業後の進路状況を中心として－」『教育臨床総合研究』9、2010年、67-78頁
- 10) 久保昌子「養護教諭を志望する学生の養護教諭イメージと職務意識の特徴－講義による変化－」『発達教育学研究：京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要』10、2015年、53-67頁
- 11) 永浜明子・宮城政也「看護大学生の養護教諭に関する認識変化～養護教諭一種免許取得希望者を対象として～」『沖縄県立看護大学紀要』6、2005年、64-72頁
- 12) 小川文子・天野敦子「『養護概説』についての研究第2報 養護教諭志向に影響する要因の分析」『愛知教育大学養護教育講座研究紀要』7(1)、2006年、31-37頁
- 13) 前掲書7)、12頁
- 14) 山浦晴男『質的統合法入門 考え方と手順』、医学書院、2021年
- 15) 高岡雅・大谷尚子「学生の養護教諭志向と適性感に関する研究－臨地実習の意義と学生指導のあり方を考える－」『日本養護教諭教育学会誌』2(1)、1999年、74頁
- 16) 前掲書12)、35頁
- 17) 野口法子『人格を育てるための健康相談：事例を通して 中学校編』、翔雲社、2017年
- 18) 大谷尚子・堀江宮子「養護教諭志望学生の養護教諭志向に関する研究－養護教諭課程への志望動機と在学中の志向の変容について－」『茨城大学教育学部紀要』34、1985年、221頁
- 19) 大学設置基準：<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=331M50000080028> (参照 2021. 8. 30)
- 20) 前掲書12)、33頁
- 21) 川上幸三「養護実習生の教職意識の変容について－養護教諭特別科生の場合－」『北海道教育大学紀要(第1部C)』45(1)、1994年、137頁
- 22) 後藤多知子・萩原琴弥・後藤和史「養護教諭志望学生における養護教諭に対するイメージの変容」『瀬木学園紀要』5、2011年、36-37頁